2D4-OS-28a-3

身体性が生む阿吽のインタラクション ―他者に承認される「先読み」行為―

Embodied "A-hum" Interaction: "Foreseeing" Authorized by Others

坂井田 瑠衣[*1] Rui Sakaida

諏訪 正樹[*2] Masaki Suwa

[*1] 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 Graduate School of Media and Governance, Keio University

[*2] 慶應義塾大学環境情報学部 Faculty of Environment and Information Studies, Keio University

When interacting with others, by observing others' bodily motions and guessing their intentions, we respond to them, even without utterances. In this research, interactions in which we see each other's bodily motions and respond to them are called "a-hum interactions". In this paper, we take two examples of a-hum interactions and analyze them qualitatively with fine-grained transcripts. It is indicated that a-hum interactions are not always one-sided, for unilateral behaviors by one participant are often authorized by another participant tacitly.

1. 阿吽のインタラクションとしての「先読み」

我々の生活における社会的インタラクションは，身体の観察可能性に依拠している．例えば駅や広場などの公共空間において，我々は他人と発話を交わさなくとも，互いの身体を観察し，他者の情報を集めながら共在している．[Goffman 63]はこれを「焦点の定まっていない相互行為」と呼んで，会話のような「焦点の定まった相互行為」と同様に，インタラクション研究が探究すべき現象に含めた．雨の日に狭い道で他人とすれ違うとき，互いに傘を外側に傾けて濡れないようにする「傘かしげ」というやりとりは，焦点の定まっていない相互行為において，人々が日常的に互いの身体を注視し，然るべき振る舞いを決めていることの顕れである．このように，互いの身体を観察することで，相手の意図や感情を汲み取って振る舞うという巧妙な相互行為を，本稿では「阿吽のインタラクション」と呼ぶ．

会話のように焦点の定まった相互行為においても，身体の観察可能性が運用されることはしばしばある．親しい友人や恋人と対面しているとき，発話を交わさなくとも，息がぴったり合って意思疎通しているかのように見えるやりとりが生じる．例えば，食事中に「相手がグラスの水を飲み干したことに気づき，水を注ぎ足してやる」という現象である．「水を注ぎ足してほしい」という明示的な意思の伝達がなくても，我々は「相手はきっと水を注ぎ足してほしいだろう」という意思を「先読み」することができる．この「先読み」が成立した時，我々は単純な意思の伝達を超えたインタラクションとしての高度さ，あるいは知的さを感じるのではないだろうか．「先読み」が成立するには，相手の身体動作を観察していなければならない．すなわち，対面相互行為という身体の観察可能性が運用されうる場面でなければ，このようなやりとりは生起しえない．

本稿では，協同調理と仕事依頼という 2 つの場面における「先読み」行為の事例分析により，我々の身体の観察可能性が「阿吽のインタラクション」を実現していることを示す．さらに，「先読み」行為が他の参与者によって何らかの方法で承認される場合に，「先読み」が単なる一方的な振る舞いに終始するのではなく，相互行為の連鎖組織としての双方向性が生まれることを論じる．

連絡先：坂井田瑠衣，慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科，〒252-8520 神奈川県藤沢市遠藤 5322，lui@sfc.keio.ac.jp

2. 分析方法

分析対象とする場面の発話・視線・利き腕の動作のトランスクリプト (図 1) を作成し，マイクロ分析を行う．発話の転記は会話分析の転記方法[西阪 08]に準じた[1]．視線については，視線方向が特定できた箇所のみ，その方向を記した．利き腕動作 (本稿では全て右腕) は[Kendon 04]のジェスチャーフェーズに準じ，各々の動作を，準備動作 (preparation; P)，ストローク (stroke; S)，ホールド (hold; H)，復帰 (retraction; R) に分解し，それらの略号 P, S, H, R を示した上で，( ) 内には具体的な動作を注記した．P1 は，「当該トランスクリプトの当該参与者において 1 度目に登場した準備動作 P」を示す．当該トランスクリプトの当該参与者において 1 度しか登場しない動作には，番号付けしていない．

3. 事例 (1): 協同調理局面移行における「先読み」

複数人が食卓を囲んで料理しながら食事する協同調理場面は，数多くの「阿吽のインタラクション」が観察される場面である．なかでも「もんじゃ焼き」は，鍋料理やお好み焼きと異なり調理工程が複雑なため，調理の進行に応じて，複数人が適切なタイミングで調理に関与することが求められる．そうかと言って，全ての調理工程が言語化されて参与者全員に共有されるわけではないため，互いの調理動作を観察しながら，「自分は今ここで何をすべきか」を判断しなければならない．

3.1 事例分析

事例 (1) (図 1) は，S, H, U の 3 名の参与者が，調理局面の理解度に差がありながらも，適宜互いの調理動作を観察することで，調理が滞ること無く進行する場面である．H がもんじゃ焼きの具材を鉄板に落とそうとしているが，実はその前に，鉄板に油を引かなければならないという調理局面である．なお，この直前に H は S から具材の入ったボウルを受け取っている．

U は，鉄板に油を引くことの必要性をいち早く「先読み」し，調味料ラックに目を向けた後，テーブルを見渡し，いったんヘラを持ち上げかける (図 1 中，U の調理動作 P)．しかし，ヘラで油を引き伸ばす前に，油を鉄板に注ぎ足す必要があることに気づき，

[1] 本稿で使用する転記の記号一覧は，本稿末尾の付録に掲載した．

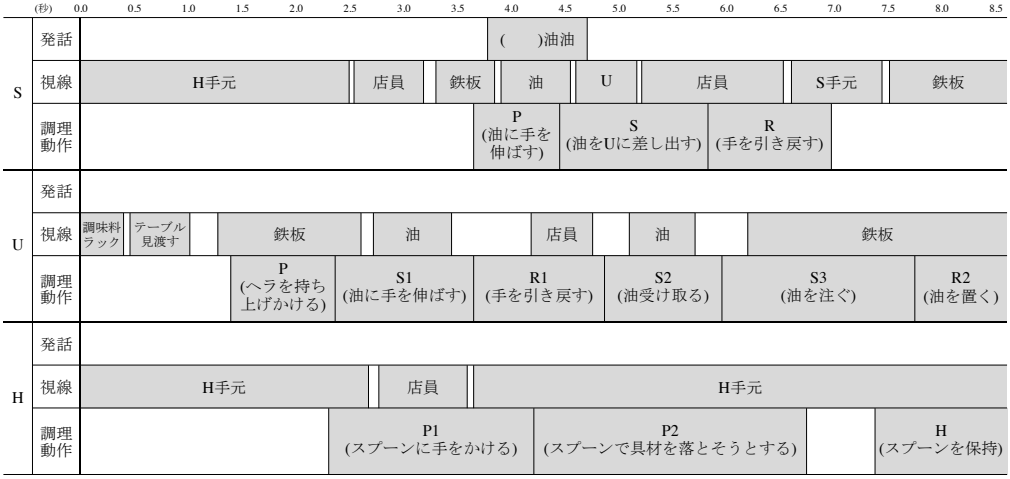

図 1: 事例 (1) の発話・視線・利き腕動作 (調理動作) のトランスクリプト.
U, S, H の順で次に移行すべき調理局面に気づき, 調理局面移行が達成される.

油のボトルに視線を移しながら手を伸ばす (図 1 中, U の調理動作 S1). 時を同じくして, H はもんじゃ焼きの具材が入ったボウルに付属していたスプーンに手をかける (図 1 中, H の調理動作 P1). この時点ではまだ, H は油を鉄板に引く必要性に気づかない.

U は油のボトルに手を伸ばすが, 手が届かずに一度引き戻す (図 1 中, U の調理動作 R1). この時, U が油のボトルを欲していることに気づいた S は,「( ) 油油」と言いながら, 手元の油に手を伸ばし, U に油のボトルを手渡す (図 1 中, S の調理動作 P, S). 油を受け取った U は, そのまま鉄板に油を注ぐ動作に移る (図 1 中, U の調理動作 S2, S3).

この場面で, U は S に対して「油のボトルを取ってほしい」と要求したわけではなく, U の手が油に届かない様子を見た S が, 自発的に U の油を手助けしたにすぎない. 確かに, U が油の方向に手を伸ばすことで「油を欲している」ことを示し, S に手渡してもらうように要求したとも捉えることはできる. しかし, この場面で U の右腕は, 鉄板上を横切る形で, かなり油に近い距離まで伸び (図 1 中, U の調理動作 S1), その後引き戻されている. 同時に視線は油および店員の方向を向いており, S の方向を向いておらず, S も U の方向を見ていない.「油のボトルを取ってほしい」という要求として U の一連の動作 (図 1 中, U の調理動作 S1〜R1) が繰り出されたのであれば, U はさほど腕を油の近くまで伸ばす必要はなく, むしろ S の方向に視線を向けて S の注意を引き, 要求の表出を気づかせることに注力することが妥当であろう.

このやりとりの中で H は, U が油を注ぎ始めてから 800ms ほど経過するまで, U が油を注ぎ終わるのを待たなければならないことに気づかない. U が油を受け取り, 油を引き始めてからもなお, まだスプーンで具材を落とそうとしているからである (図 1 中, H の調理動作 P2). その後 H は, スプーンを保持して油の引き終わりを待つ体勢に移行する (図 1 中, H の調理動作 H) が, この時になって初めて H は, 油を引くべき局面であることに気づいたと思われる.

3.2 他者に承認される「先読み」

このやりとりでは, H がボウルを S から受け取って具材を落とす準備を始めるという動作を観察した U が, 油を引くことの必要性を「先読み」することにより,「油を引く」という調理局面が開始される. さらに, U が油を探索していることに気づいた S が, U に油を手渡してその動作を補助する. たとえ H が油を引くことの必要性に最後まで気づかなくとも, U と S がいち早くその局面に気づくことで,「油を引く」という局面への移行は滞りなく達成される. 協同調理の参与者間では, 最初から調理局面についての合意がなされているわけではなく, まず誰かがある調理局面への移行の必要性に気づき, その局面に必要な動作を開始することで, 他者がその局面の変化を遡及的に理解するようである.

U は H がボウルを受け取る動作を観察したことで, 油を追加する必要性に気づいているが, むろん H の動作にはその情報を送信する意図はない. S が U に対して油を手渡す必要性に気づく際も, U は S に対して油のボトルを手渡すように伝達しているわけではない. 同様に, H が U の油を注ぎ始める動作に気づいて, 具材を落とすのを中断し保持する際にも, U から動作を中断するように伝達を受けているわけではない. [高梨 10]は, 他者の身体の観察可能性を利用して環境の情報を間接的に獲得することを「他者の認知の利用」と呼んだ. この場面では, U が H の認知, すなわち身体動作を利用して局面移行を開始し, さらに S と H が局面移行を開始した U の認知を利用することにより, 調理局面移行が達成される. 参与者たちは, 相手の出方に合わせて勝手に「他者の認知を利用」し, 自らの振る舞いを独断で変化させているにすぎないのに, 全体としては協同調理が円滑に進行している. 互いが他の認知を一方的に利用することにより, たとえ調理局面に対して参与者間で理解度が異なる状況でも, 全体としては互いに滞りなく意思疎通し合っているかのように見える.

なぜ単に他者の認知を利用することで, 互いが意思疎通しているように見えるのだろうか. それは, 当初は一方的なものとして開始された他者の認知の利用が, 参与者間で調理過程に必要なものとして承認されるからである. U は H の身体動作を参照し, 油を引くための身体動作を開始する. そこで S や H は, 油を引こうとする U の動作を参照し, 油を手渡したり具材を落とすのを中断したりすることで, U の一方的な参照を身勝手なものではなく, 調理過程に必要な参照として承認しているのである. たとえ当初は伝達意図が存在しなくても, 互いが他の「他者の認知の利用」を承認したと認識できる次なる「他者の認知の利用」を繰り出すことで, それらのやりとりは相互行為としての連鎖性を帯びるのである.

次章では, 他者が「先読み」を承認したことがより明白に観察できる事例を分析する.

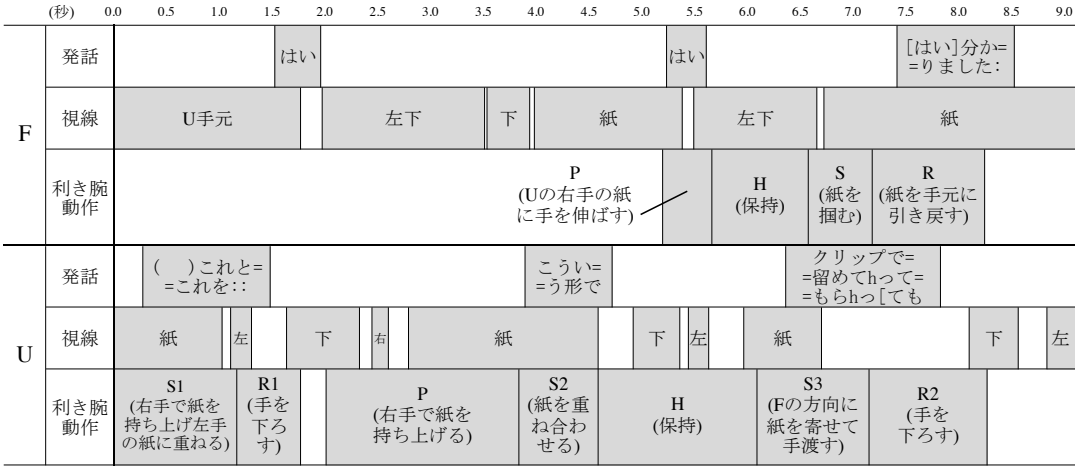

図 2: 事例 (2) の発話・視線・利き腕動作のトランスクリプト.
F が仕事内容を先読みすることによって, U の教示と受け渡しが効率化される.

4. 事例 (2): 仕事内容の教示における「先読み」

ある人が他人に道具を手渡して仕事を手伝うように依頼する時, 依頼主は仕事の手順を教示するとともに, 相手に道具を手渡さなければならない. この時, 依頼される者が依頼主の意図や教示内容を「先読み」することによって, 教示や手渡しの過程が効率化されることがある. この時,「先読み」が他者に承認されたか否かを, その後の他者の反応から読み取ることができる.

4.1 事例分析

事例 (2) (図 2) は, ある展示会の会場における出展者 U が, 来場した先輩の F に仕事の手伝いを依頼する場面である. 依頼される仕事内容は「複数枚の所定の用紙をクリップで留める」というものである. U が F に対し, 手伝ってほしい仕事内容を教示し, その仕事を遂行するための道具を手渡す. U はまず仕事内容を教示してから, F に道具を手渡そうとしているが, F は U の教示が終わるのを待たずに, U から道具を受け取ろうとする, というやりとりである. このやりとりの直前, F は U に「仕事があれば手伝う」という提案をしている.

まず U は, 右手でテーブル上の紙を持ち上げ, 左手に持っている紙に重ねながら (図 2 中, U の利き腕動作 S1),「( ) これとこれを::」と言って仕事内容の教示を開始する. その後 U は一度手を下ろし (図 2 中, U の利き腕動作 R1), 再び右手で新しい紙を持ち上げ (同, U の利き腕動作 P), 紙を重ね合わせながら (同, U の利き腕動作 S2),「こういう形で」と教示を続ける. ここでの発話に格助詞「で」が用いられていることは, まだ U の発話が完了可能点[Sacks 74]に到達しておらず[2], この後も発話が続くことを投射している. すなわち, U による仕事内容の教示が完了しておらず, 教示がこの後も続くことが示唆されている. しかしその直後, U はその教示に必要な道具 (クリップ) を探そうとして, 教示の発話を中断し, それまでは手元の紙に向けていた視線を下および左方向に移動する.

ここでその様子を見ていた F は, U の右手方向に手を伸ばし (図 2 中, F の利き腕動作 P), U が持っている紙を受け取ろうとする. U の教示が完了していないにもかかわらず, F は仕事内容がその紙を使用した作業であろうということを「先読み」し, いち早く道具を受け取ろうとしたと考えられる. 加えて, U がクリップを探すのに専念できるようにという配慮から, 一刻も早く紙を受け取ろうとした可能性もある.

しかし U はこの時クリップを探索していて F の方向を見ていないため, F が紙を受け取ろうとしていることにすぐには気づかない. そこで F は右手をそのままの位置で保持し (図 2 中, F の利き腕動作 H), 紙を受け取るタイミングを見計らい始める. その直後に U は再び手元の紙に視線を戻し, そこで F が紙を受け取ろうとしていることに初めて気づく. そのまま U は F の方向に紙を寄せることで, F に紙を手渡しながら (図 2 中, U の利き腕動作 S3),「クリップで止めて h ってもら h っても」と, 笑いながら教示の続きを発話する ("h"は笑いが産出された箇所). この際 F は, U の発話が終了するのを待たずに「はい分かりました:」と言って作業を了解しようとし, U の発話は再び完了可能点に達しないまま中断される.

4.2 先読みにおける「先走り」と「配慮」の二面性

この場面では, U が教示を終了するのを待たずに F が道具を受け取ろうとしたことで, 教示と受け渡しの同時進行による効率化が達成されている. U は教示を中断してクリップを探索する間, 紙を持った右腕を保持していることから, 教示が終了していないその時点では, まだ F に道具を手渡そうとしていなかったと推測される. 一方 F は, U がクリップを探索し始めたタイミングで, 紙の受け取り動作を開始している. 教示の完了を待たずいち早く仕事内容を「先読み」し紙を受け取ろうとした F に対し, U はそれに気づくとすぐに, F に紙を手渡す動作を開始する. U は F がいち早く紙を受け取ろうとする動作に同調することで, F の「先読み」を承認したと考えられる. その結果, U は F に道具を手渡しながら仕事内容の教示を続け, さらに F が U の発話の完了可能点を待たずに了解したことで, U の教示は簡略化された.

このやりとりが相互行為として興味深いのは, F の「先読み」行為が,「先走り」と「配慮」の二面性を孕むという点である.「先読み」は,「先走り」と紙一重である. つまり, 良かれと思って先を読んで行動することは, ややもすれば独りよがりになり, 相手の意思を踏みにじることに繋がりかねない. U が仕事内容の教示を完了していないにもかかわらず, F がいち早く道具を受け取ろうとすれば, U の教示の腰を折ってしまい, 仕事内容が適切に伝達されなくなる可能性がある. しかも, F が U から紙を受け取ろうとする際, U は F に視線を向けていないため, U が F の受け取り動作を見られない状態にもかかわらず, U から無理に紙

[2] 日本語会話では, 助動詞や終助詞などの「発話末要素」の出現が発話の完了を投射する[榎本 03]. 現在産出されている発話や身体動作が, その後産出されるべき発話や動作を予告するはたらきを「投射」と呼ぶ.

を奪い取ろうとしているという印象さえ与える. しかしここで, F の先読みは U にとって否定的には受け取られず, むしろ先読みへの同調という振る舞いによって承認される.

ここでの先読みが, 単なる「先走り」ではないことが正当づけられるのはなぜだろうか. それは, この先読みが「先走り」と同時に「配慮」の側面を兼ね備えているからである. F が先読みの動作を開始したのは, U が紙を右手に保持したまま左および下方向に視線を向け, クリップの探索を始めた直後である. この時 U は, 仕事内容の教示に必要なクリップを探索するために, 教示行為を一時中断しなければならなくなっている. クリップが発見された後すぐに教示を再開できるよう, U は右手に持った紙をその高さで保持したまま, 左手で探索動作を開始した. 教示に使っていた道具をそのままの高さで保持することで, 教示行為がまだ完了していないことを示すという意図も込められていたとも考えられる. そのため U がクリップを探索する動作は左手だけで行われる必要があり, 非利き手による非効率的な探索となった. その時点で仕事内容をある程度理解していた F は, いち早く紙の受け取りを開始することにより, U がクリップの探索に専念できるように手助けした可能性がある. つまり, F が U の教示完了を待たずに仕事内容を「先走って」理解したことで, 先に紙を受け取ることにより U のクリップ探索動作に「配慮」することが可能になり, 結果として単なる「先走り」として暴走する可能性が「配慮」によって相殺されたのである. U が F に視線を向けていない状態で, F が奪い取るかのように紙を受け取ろうとしたことも, F の先読みが「配慮」の側面を孕んだことで正当化される.

4.3 遡及的に生成される発話送出 / 聞き手アドレス行為

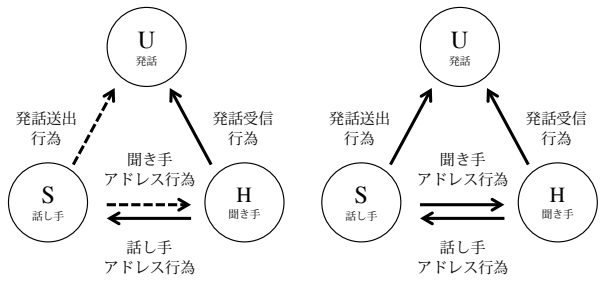

図 3: 事例 (2) において変化する SHU 図式. F の一方的な「受け取り」(左図) が, U の承認による発話送出行為／聞き手アドレス行為の遡及的生成によって右図に変化する.

このやりとりの中で漸進的に生まれた相互行為としての双方向性を, [木村 10]による「SHU (Speaker-Hearer-Utterance) 図式」を用いて説明する (図 3). ふつう, 発話において話し手は「発話送出行為 (自分が何を発話しているか)」と「聞き手アドレス行為 (発話が誰に対して行われているか)」を行い, 同時に聞き手は「発話受信行為 (自分がまさにその発話を聞いている)」と「話し手アドレス行為 (自分が誰の発話を聞いているか)」を行っている (図 3 中, 右図) [木村 10].

ところが, 一方的に「他者の認知を利用」する阿吽のインタラクションにおいては, 必ずしもその 4 つの行為が全て見られるわけではない. 事例 (2) の場合, U が紙を F に手渡そうとしていないにもかかわらず, F は勝手に U から紙を受け取ろうとする. すなわち, 発話送出行為と聞き手アドレス行為が希薄であるにもかかわらず, 発話受信行為と話し手アドレス行為をしようとする[3] (図 3 中, 左図). F が一方的に紙を受け取ろうとしていることに気づいた U は, 紙を手渡す動作 (図 2 中, U の利き腕動作 S3) , すなわち発話送出行為を開始することによって, F の発話受信行為／話し手アドレス行為を承認する. つまり, F が紙の受け取りを開始した当初に存在しなかった U の発話送出行為／聞き手アドレス行為が, U の承認によって遡及的に出現したということである.

[3] ここでの「紙を手渡す／受け取る」行為は「発話」ではないが, [木村 10]の図式に照らし, そのままの用語で議論する.

5. 結論

「阿吽のインタラクション」の一形態である「先読み」行為は, 対面相互行為における身体の観察可能性によって実現される. ある参与者の一方的な「他者の認知の利用」として開始される「先読み」行為は, 意識的にせよ無意識的にせよ, 他の参与者によるその後の振る舞いを通じて, その正当性が承認されることで, 相互行為としての連鎖性が生まれる. 先読みが必ずしも単なる「先走り」に終始しないのは, 参与者たちが共同で達成しようとしている目標に到達するための「配慮」という側面が含まれるためである. 「先走り」と「配慮」の二面性を孕んだ諸刃の剣としての「先読み」行為は, 他者がその行為に対して同調的に振る舞うことによって承認され, 相互行為としての双方向性を帯びる.

謝辞

活発な議論の中で多くのご助言をいただいた身振り研究会の参加者各位に感謝する.

参考文献

[榎本 03] 榎本美香: 会話の聞き手はいつ話し始めるか: 日本語の話者交替規則は過ぎ去った完結点に遡及して適用される, 認知科学, Vol. 10, No. 2, pp. 291-303 (2003)

[Goffman 63] Goffman, E.: *Behavior in Public Places: Notes on the Organization of Gatherings*, The Free Press (1963) (丸木恵祐, 本名信行 (訳): 集まりの構造―新しい日常行動論をもとめて, 誠信書房 (1980))

[Kendon 04] Kendon, A.: *Gesture: Visible Action as Utterance*, Cambridge University Press (2004)

[木村 10] 木村大治: 「Co-act」と「切断」―バカ・ピグミーとボンガンドにおける行為接続, 木村大治, 中村美知夫, 高梨克也 (編): インタラクションの境界と接続―サル・人・会話研究から―, pp. 231-253, 昭和堂 (2010)

[西阪 08] 西阪仰, 串田秀也, 熊谷智子: 特集「相互行為における言語使用: 会話データを用いた研究」について, 社会言語科学, Vol. 10, No. 2, pp. 13-15 (2008)

[Sacks 74] Sacks, H., Schegloff, E. A., Jefferson, G.: A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation, *Language*, Vol. 50, No. 4, pp. 696-735 (1974)

[高梨 10] 高梨克也: インタラクションにおける偶有性と接続, 木村大治, 中村美知夫, 高梨克也 (編): インタラクションの境界と接続―サル・人・会話研究から―, pp. 39-68, 昭和堂 (2010)

付録: 転記の記号 ([西阪 08]より一部抜粋して使用)

[	発話のオーバーラップ開始地点
]	発話のオーバーラップ終了地点
=	発話が途切れなく密着している
言葉::	音声の引き延ばし
言 h	笑いながら産出される発話
( )	聞き取り不可能な箇所